一般質問補助資料　南川直人
（AIを用いて作成したイメージ図）

県庁のあり方そのものを見直す時代へ

一つの巨大な庁舎に集約する時代から、機能を分散し、つながり、ひろがる「ネットワーク型県庁」へ

従来の県庁（集約型）　＝　一つの巨大な庁舎にすべてを集める

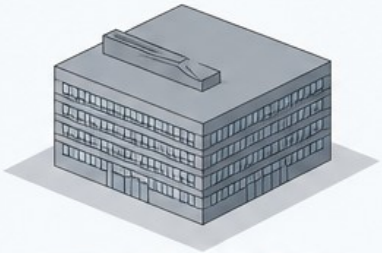
特徴

- 一つの建物にすべての部署
- 職員が同じ場所に出勤
- 来庁型の行政サービス
- 紙文書・対面手続きが中心
- 庁舎の建設・維持に多額の費用

課題

- 建設費・維持費の負担が大きい
- 災害時のリスクが集中
- 部署間の移動や連携に時間がかかる
- 変化への対応が遅くなる
- 県民との距離が遠い

イメージ図



一つの巨大な箱に、すべての機能を集約

行政サービスのイメージ

新しいイメージの県庁（分散・ネットワーク型）　＝　小さく・やわらかく・つながる県庁へ

福井駅周辺の既存ストックを活用し、機能を分散配置。建物をつくるのではなく、機能をつなげる。

県民に近い県庁
まちなかに機能を配置し、県民が利用しやすい

柔軟で持続可能な県庁
変化に応じて機能を組み換えやすく、将来に柔軟に対応

コストを抑えた県庁
既存の空きビル・空き店舗を活用し、投資を最小化

分散配置のイメージ（福井駅周辺）

県庁の考え方

これまで
「県庁＝一つの建物」に集約する発想

これから
「県庁＝機能のネットワーク」として捉える発想

将来の姿

- ICT・クラウドでつながる
- オンライン会議・テレワークの活用
- 県民はオンラインで多くの手続きが可能
- ドローンやMaaSなど新技術とも連携

行政サービスのイメージ（県民目線）

20年後・30年後の福井を見据えた新しい県庁の姿へ